

♪ 2021年度 **poco a poco** ♪

Nr. 21 2022年1月10日(月)

文責:プファイル・辰巳

今年もよろしくお祈いします！

2022年の幕開けはいかがでしたか。コロナと共に迎える3度目のお正月となりましたが、今年こそは収束に向かって欲しいですね。休み明けは感染者数がいつも増えますし、オミクロン株の感染力も気になるころではありますが、春の訪れとコロナ収束を心待ちにしつつ、明るい気持ちで3学期をスタートしましょう。

3学期は短いですが、1年間のまとめをする大事な時期です。一日一日を大切にしながら、充実した学期を過ごしたいものです。寒さに負けず、元気に毎日登校してください。音楽室で待っています。



音楽こぼれ話 <その時、作曲家は・・・ ①

ショパンと「革命」のエチュード >

フェレデリック・ショパンは1810年、ポーランドに生まれた前期ロマン派を代表する作曲家です。フランス人の父とポーランド人の母を持ち、後半生をパリで過ごしたこともあり、フランス人と間違われることもあります。出身はポーランドです。数々のピアノの名曲を残したので、「ピアノの詩人」とも呼ばれています。

ショパンが生きた時代、ポーランドはロシア帝国の影響下にありました。1830年11月、青年ショパンは祖国を後にし、まず音楽の都ウィーンに向かいます。その後、いわゆる「11月蜂起」と呼ばれるロシア帝国に対する反乱がポーランドの首都ワルシャワで発生しました。これを機にロシアとポーランドは戦争状態になりました。

この戦争は1831年に入っても続き、2月にはロシア軍がついに国境を越えてポーランドに侵攻してきました。ショパンは故郷を気遣いながらも、音楽家としての新天地

を求めて、ウィーンからパリを目指すことにします。その途上にあつた1831年9月、ポーランドの革命が敗北に終わったことを、ショパンはシュトゥットガルトで知りました。

その時の失望と怒りを込めて作曲されたのが、別名「革命」と呼ばれている練習曲作品10の12番・ハ短調のエチュード(練習曲)だと言われています。練習曲ですから演奏技術の向上のために作曲されています。この曲では左手が細かいアルペジオをポジションチェンジしながら、非常に速いテンポで弾かなければいけません。右手はユニゾンでメロディを力強く、叙情豊かに演奏します。練習曲とはいえ非常にハイレベルで、ピアノサイタルなどでも好んで演奏される名曲の一つです。

エチュード「革命」が作曲されたのは、このように1831年のことでしたが、「12の練習曲集 作品10」として発表されたのは1833年、パリの演奏会でのことでした。この練習曲集には、「革命(12番)」の他にも、有名な「別れの曲(3番)」や「黒鍵(5番)」などが含まれています。ちなみに12番を「革命」と呼び始めたのは、ショパンの友人で良きライバルでもあつた作曲家リストだと言われています。

ショパンの「12の練習曲集」は、もう一つ、作品25という曲集もあつて、こちらには「エオリアンハーブ(1番)」「蝶々(9番)」「木枯らし(11番)」などが含まれています。これらの曲集の中には、別名が付いていなくても、とても美しく有名な曲も、もちろんあります。

ショパンが生きていた時代、祖国ポーランドはこのように独立を目指して何度も蜂起しますが、その都度ロシア軍により鎮圧されるという歴史をくり返していました。ポーランドが独立して第2共和国を立ち上げるのは、1917年のロシア革命後になります。

そして、ショパンはというと、パリの音楽界では「ピアノの名手」、美しいピアノ曲の作曲家「ピアノの詩人」としての名声を得るとともに、女流作家ジョルジュ・サンドとの恋愛など、華やかな話題もある生活を送りました。しかし、元々虚弱な体質であり、1849年、39歳という若さで世を去りました。死因は肺結核とされています。

ショパンのお墓は、パリのペール・ラシューズ墓地にあり、ここには作曲家ビゼーやロッシニ、作家のバルザックやモリエールといった著名人が永眠しています。ちょっと怖いようなお話を付け加えると、実はショパンの心臓だけは埋葬の前に取り出され、実姉の手によりアルコール漬け状態で持ち帰られ、ワルシャワの聖十字架教会の柱に埋め込まれているとのこと。心臓だけが故郷に戻ったというわけです。

